

紀 要

第 1 号

目 次

『紀要』の創刊にあたって

1. 琵琶湖湖底遺跡の調査の現状……………(濱 修)
 2. 近江の地域色の再検討
—弥生時代後期～古墳時代初頭における高坏形土器・器台形土器の実態—
……………(小竹森直子)
 3. 古式土師器研究ノート(1)……………(森 格也)
 4. 竪穴住居に付随するカマドの検討—滋賀県下の検出例から—……………(宮崎幹也)
 5. 衣川廃寺の再検討……………(細川修平)
 6. 穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐって
—穴太廃寺のもつ問題点からのアプローチ—……………(仲川 靖)
 7. 中世土師器皿と生産地……………(横田洋三)
 8. 近江における瓦質土器について……………(奈良俊哉)
 9. 浮世絵にあらわれた煎茶茶碗……………(稲垣正宏)
 10. 魚獲りって難しい—抄網の機能と形態—……………(大沼芳幸)
-
-

1988. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

5. 衣川廃寺の再検討

細川修平

1. はじめに

古代近江国特にその南半部は、古代寺院の集中する地域である。飛鳥時代後半に創建の起原を有するもの、あるいは白鳳時代と言えどもその後半期に建立されたもの等々、各古代寺院の建立過程は個性的である。しかし、近江南半部の古代寺院の建立の背景に、近江大津宮の成立が存在する事実も否認しない。崇福寺・南滋賀町廃寺・園城寺境内廃寺・草津宝光寺等々である。これらの諸寺院跡では、「素弁系瓦」と「複弁系瓦」の混用、方形瓦の存在、瓦積基壇の採用等の強い共通性を示している⁽¹⁾。言わば、共通性によって保障された『近江大津宮的都市景観』を形成していたのである。

一方、確実に近江大津宮時代に存在し、しかも「共通性」から疎外された近江南半部の古代寺院も存在する。堅田衣川廃寺がそれである。大津市堅田地区には、春日山群集墳や曼陀羅山群集墳が存在し、古墳時代後期には近江における最重要な地域の一つであったと想定される。あるいは、文献史料によって春日氏や小野氏の住居が知られ、彼らは和邇系氏族として古代国家成立過程において活躍したものである。当然、近江大津宮時代においても、そこに居住した氏族は無視し得ない存在であったと考えられる。しかし、その地で建立されつつある衣川廃寺は、近江大津宮の「共通性」より疎外され、『近江大津宮的都市景観』の外部に位置していたのである。

こうした事実は、衣川廃寺の建立氏族の性格や近江大津宮の意味を考察する上において無視し得ないものとなってくる。小稿においては、こうした視点に立って、衣川廃寺の表出する問題点を整理してみたいと考える。数年前、筆者は大津市教育委員会吉水真彦氏と共に衣川廃寺出土遺物を実見する機会を得た⁽²⁾。小稿は当時のメモを整理したものである。総合的な古代寺院論を計画して遺物を観察したものではない為、断片的な記述の形しか採れなかった。しかし、「覚書き」として筆者の衣川廃寺に関するイメージを提出し、今後の古代寺院論への礎としたいと考えるものである。

2. 衣川廃寺の位置

衣川廃寺は、大津市堅田衣川町西羅に所在する。

堅田地区では、比良山系に源を発する真野川あるいは天神川等が扇状地・三角州を形成しており、「志賀丘陵」と琵琶湖との間に湖西地区では比較的大規模な平野部が展開している。衣川廃寺は、その最南端部に位置しているが、もはや全面に広がるべき平野部は乏しく、現在より数m上方に存在したであろう琵琶湖の汀線を考えれば、まさに湖畔に面した寺院の姿が想定される。

その立地は、所謂「丘陵先端部」に該当する。すなわち、志賀丘陵の一角であり、西羅古墳群

の立地する丘陵尾根の先端部にあたる。しかし、自然丘陵をそのまま利用して、寺院が建立されているわけではない。他の古代寺院一般と同様に、相当の削平・盛土の工事を実施し、寺域を設定したものである事実は説明の必要もないだろう。かつて、衣川廃寺跡と西羅古墳群との間に丘陵を切断した道が存在した。寺院の主軸と一致するものであり、寺域の設定に伴う削平の痕跡であると考えられる。衣川廃寺建立に際した大規模な土木工事の一例証である。寺院跡は、海拔100m前後付近に位置し、付近の水田面との比較差は3m強のみであるが、丘陵下方の水田面とでは13m前後を測る。寺院跡からの眺望はきわめてよく、湖南地域がほぼ一望できる。また、この水田面付近の標高(約87m)が当時の汀線に近いものであったと考えられる。

寺域は、先述の西羅古墳群との間に存在した道路がその西限と考えられ、これを基準として丘陵部全体に広がりをも求めても、せいぜい100m四方の空間が想定できる程度である。すなわち、南北は小開折谷によって、東は丘陵崖によって、西は丘陵切断部によって、それぞれを画された1町四方のやや小規模な寺域が想定される。

ところで、堅田衣川地区には他にも古瓦を出土する地点が存在する。巨視的にみれば、この範囲は衣川廃寺を中心とする南北750m、東西150m程度の範囲に広がるものである。一方微視的に見れば、古瓦散布地域は丘陵先端部付近に限定されるものと言える。瓦窯址等の存在も十分に考えられるが、寺院関連の諸施設が各丘陵先端部に分散的に配置されていた可能性も強い。また、付近一帯から緑釉陶器や円面硯等が広く出土しており、何らかの官衙施設の存在を予想することも可能である⁽⁴⁾。この場合は、官衙施設の一角として衣川廃寺が存在したものと理解できる。いずれにしても、付近に広く古瓦が散布し、かつ緑釉陶器等も同時に確認されている事実は、衣川廃寺が孤立的に造営されたものではなく、付近一帯が古代における「中心地的様相」を呈しつつ、その中にそれらと関連しつつ衣川廃寺が建立されたものである事実を示すのである。

では、ここで周辺の遺跡について簡単に見ておきたい。

まず注目されるものは、西羅古墳群と坂尻古墳群の存在である⁽⁴⁾。前者は全長50mの帆立貝形前方後円墳と、規模等の詳細は不明であるが一基の方墳から構成される。古墳時代中期に比定され、帆立貝形前方後円墳の存在は、田中王塚古墳や木ノ岡丸山古墳等近江の古墳時代中期の特徴と理解される。後者は中規模の円墳2基から構成される。しかし、1号墳では埴輪の存在が知られており、かつ、確実ではないが「作出し」の存在も予想される。古墳時代中期の所産であり、西羅1号墳と同様の性格を帯びたものである。

春日山古墳群は、衣川廃寺からやや離れて存在する⁽⁴⁾。しかし、堅田地区の南半部に位置し、同一の基盤によって成立した可能性も強い。E-1号墳(前方後円墳全長60m)は墳形より前期に比定される。E-10・12号墳も木棺直葬系の主体部のようであり、E-1号墳に近い年代が予想されている。他の195基の古墳は、いずれも横穴式石室を内部主体とする後期古墳である⁽⁴⁾。すなわち、近江でも最大級の群集墳を形成するものであり、有力な氏族の存在あるいは職能等によって組織された有力な集団の存在を予想させる。堅田地区では他に100数十基から構成される曼陀羅山古墳群が存在する。堅田地区の北半部を基盤とするものである。これら春日山・曼陀羅山両古墳群は、大津北郊の諸群集墳とは石室構造等より確実に区別されるものであり⁽⁷⁾、堅田地区の独自性

と有力性を示すものと理解されよう。

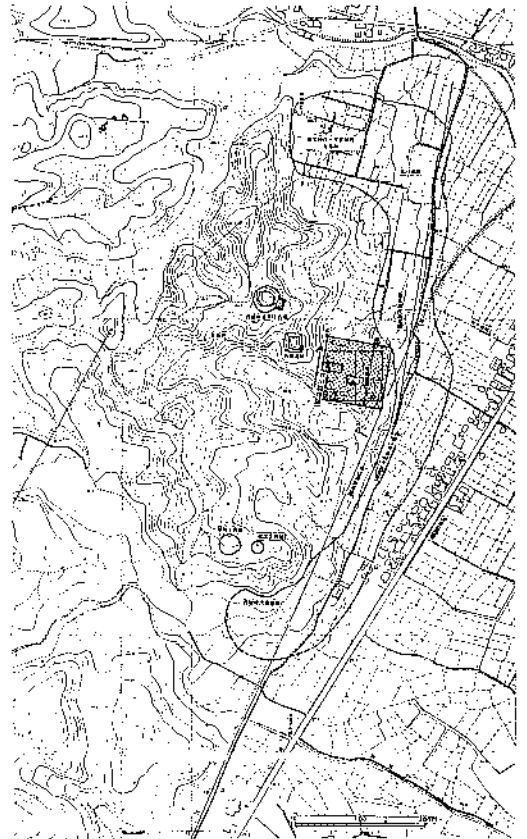
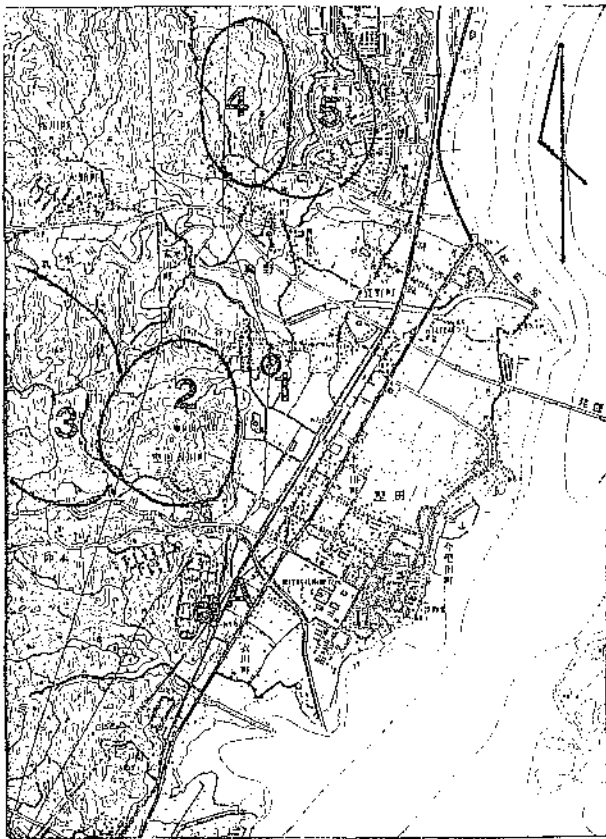
さらに、こうした堅田地区の独自性と有力性を示す例証として、窯業活動の存在が指摘できる⁽⁹⁾。天神山窯跡群と知原遺跡を、それぞれ中心とする2大窯跡群の存在である。天神山窯跡群では確実に6世紀後半代には創業を開始したものと考えられ、これは、近江では鏡山窯跡群と並ぶ古い年代を示すものである。同時に天神山窯跡群の規模は、鏡山窯跡群に決して劣るものとは言い難い状況を呈している。さらに、庄田支群出土須恵器には朝鮮系とも理解できるものが含まれており⁽¹⁰⁾、西羅^{サイレン}と言う地名の存在とも合わせて、興味深い事実である。知原遺跡を中心とする地域は、未調査のまま破壊されたものが多く存在するようであり⁽¹¹⁾、その詳細は不明である。6世紀末頃には操業を開始しているようであり、あるいは天神山窯跡群と同程度の内容を示すものかもしれない。いずれにしても、天神山窯跡群は春日山古墳群を取り囲むかのように、知原遺跡等は曼陀羅山古墳群に接近して、それぞれが展開している。須恵器の古墳副葬を指向して、これらの窯業活動が開始されたとの理解が存在するが⁽¹²⁾、逆に窯業活動の開始が、群集墳の爆発的な造営を可能にしたと理解することもできる。そしていずれの理解にしても、堅田地区の独自性と先進性を示す不可欠な資料と言い得るであろう。

また、一般の集落遺跡では、衣川廃寺をも含めた広大な衣川遺跡が存在する。衣川遺跡では先述のように緑釉陶器や円面硯が出土しており、官衙等の存在が予想される。しかし、遺跡の形成はさらに古い段階に求められ、官衙等の存在は、発展の一つの到達点である。今、衣川廃寺基壇出土の縄文土器を除いてみれば、弥生時代後期には確実に開発の初現が求められる⁽¹³⁾。あるいは、春日山・京ヶ山・惣山という高地性集落の存在からすれば⁽¹⁴⁾、弥生時代中期には付近の開発が実施されていたものと考えられる。鞍懸神社付近の発掘調査では掘立柱建物が検出された他、5世紀代の土師器を多量に含む包含層の存在が確認されている⁽¹⁵⁾。つまり、衣川遺跡では、志賀丘陵と琵琶湖に挟まれた狭小な範囲ではあるが、弥生時代以降開発が本格的に実施され、当初は小開折谷等を利用したものであったが、やがては官衙等の存在をも想定させる大規模なものに発展していったのである。こうした急激でかつ確実な発展こそが、西羅古墳群・坂尻古墳群・春日山群集墳・衣川廃寺と連続する各時代のメルクマーク的構築物を維持していく基盤となる。

以上、やや饒舌になったが衣川廃寺の位置と付近の遺跡について見てきた。衣川廃寺が堅田地区の歴史的発展過程から逸脱したものではなく、弥生時代以来の段階的発展に従うものである事実を確認するためである。その中であって、天神山窯跡群の成立は大きな画期である。どのような意図によって窯跡群が成立したものか、あるいはどのような系譜で技術導入を達成したか等については不問とするが、その成立によって工人等の移住・生産関係の再編成・土地利用法の変化・交通体制の再編成等々の社会変革の契機と成るべき諸現象が一度に展開したであろう事実にはいずれの場合も差異は無い。そして、この事実こそが急激な社会変化を達成せしめるものであり、具体的には爆発的な春日山群集墳の造営を保障していったのである。また、こうした現象を達成せしめるだけの権力が存在した事実を示すものであり、さらにこうした現象によって、その権力が一層強化されていくべきものである。つまり、その権力こそが衣川廃寺の建立主体に直結するのである。堅田地区における段階的な歴史的発展を基礎とし、窯業活動の導入に伴う権力の強化

を前提とし、そこに何らかの契機が加えられた時に、衣川廃寺が建立されたのである。しかし、その契機が有効性を弱めた時点において、衣川廃寺は廃絶していくべきものであった。窯業活動は10世紀代まで継続するが、衣川廃寺の歴史はそれに比してあまりにも短い。

最後になったが、衣川廃寺の伽藍について簡単に説明を加えておく。伽藍は2つの建物のみから構成され、これは衣川廃寺が決して完成されたものでは無い事実を示している。東方建物は1辺約10m・高さ1.25mの基壇上に存在する。基壇が正方形であり、その中央に礎石の存在が予想される点から、この建物は塔であると考えられる。基壇は版築によって形成される。北方建物は、東西14m・南北18mを測る基壇上に存在する。ただし、この数値は削平等によって変化したものであり、本来南北13m・東西15m程度以上のものであると考えられる。礎石や根石等が若干残存しており、この状況より東西5間、南北4間の建物の存在が想定される。規模あるいは南面する点からすれば金堂と推定できる。塔と金堂のみが認められるのである。そして、この塔と金堂の位置



第1図 衣川廃寺 位置図
 A. 衣川廃寺 4. 曼陀羅山古墳群
 1. 真野中村廃寺 5. 知原窯址群
 2. 春日山古墳群 1 : 50000
 3. 天神山窯址群

第2図 衣川廃寺周辺地形図 (文献1より)

関係より、西金堂と講堂は最低限必要な伽藍であると考えられ、この場合伽藍配置は所謂「川原寺式」に復元される。すなわち、衣川廃寺は当初川原寺式の伽藍配置を計画したものであるが、金堂と塔が完成したのみで、途中廃絶したものと考えられる。そして遺物出土状況を加味すれば、『最初金堂が建立される。この段階で塔の位置には瓦塔が置かれている。瓦塔がある時点において破棄され、その位置に塔が建立される。ただし、塔が完成したか否かは不明であり、この段階に衣川廃寺は火災によって廃絶する。』というその建立から廃絶への過程が復元されるのである。そしてこの過程から、一堂塔ずつ、非常にゆっくりとしたスピードで建立されていた事実が想定される。

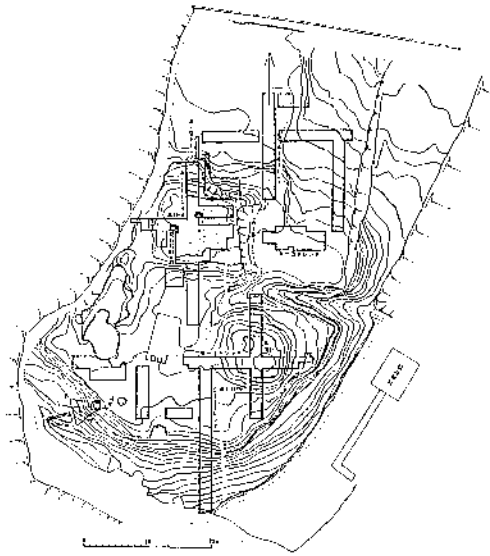
3. 衣川廃寺の軒丸瓦とその沿革

衣川廃寺からは6種の軒丸瓦が検出されている。塔と金堂のみの主要伽藍しか有さず、しかも後述するように極めて短期間の存在でしかなかった寺院跡としては、この6種という数値は極めて異例とも言い得るものである。軒丸瓦の多様さが、衣川廃寺における一つの特徴となっている。まず、この6種の軒丸瓦を概観し、その年代観について述べておきたい。

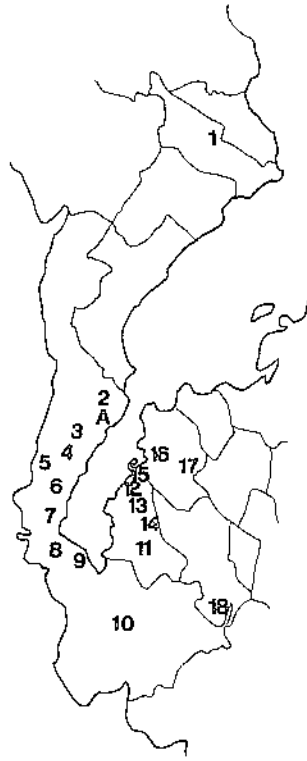
I類—素文縁素弁 8 葉蓮華文瓦 所謂「飛鳥様式」と呼ばれる軒丸瓦で、中でも最も退化した百濟系瓦である。中房は小振りなものであるがやや高く突出し、1+4の蓮子を基本的に有する。花卉は肉薄に表現されるものであるが、中房より伸びる「T字」形に近い間弁によって各花卉が表現されているという状況に近い。間弁は鋭角的であり、そのため各花卉は剣先状を呈する幾何模様に近いものとなっている。周縁は幅広で高く突出する。むしろ花卉の繊細なモチーフと一致しない異様な感を受けるものである。あるいは、この周縁は瓦当と丸瓦の接合の関係から生じたものかもしれない。珠文によって花卉の返りを表現していない点で異なるが、中宮寺式もしくは、奥山久米寺式と呼ばれる一連の軒丸瓦に近いものである。

II類—素文縁有稜線弁 8 葉蓮華文瓦 「飛鳥様式」の軒丸瓦であり、高句麗系と呼ばれるものである。中房はやや大形化したものであるが、さほど高く突出するものではない。蓮子数に関しては不明であるが、比較的少数なものと思われる。花卉は肉厚で表現されるやや細長いタイプである。ゆるやかな花卉の返りを表現し、中央に稜線を立てるが、これは明瞭さを欠き形骸化したものである。間弁は楔形から退化した二等辺三角形に近いものであり、鋭さに欠け、肉厚に表現されている。周縁部は幅広で比較的高く突出している。所謂豊浦寺式瓦から退化したものである事実は説明の必要もないが、その最大の特徴である花卉中央の稜線は消滅の直前的状況を呈している。高句麗系飛鳥様式ではあるが、花卉の丸みや間弁の形状等の全体的なシャープさの欠除は百濟末期様式との関連を想起させる。

III類—素文縁素弁 8 葉蓮華文瓦 所謂「百濟末期様式」の軒丸瓦である。中房は大形化したもので比較的高く突出する。1+6+6の蓮子を有するものの他、少数の蓮子数のものも存在する。花卉は肉厚に表現される「百濟末期様式」特有のものであり、花卉中央には弱い稜線が存在する。間弁は楔形を呈するものであるが、先端部が長く、中房付近にまで伸びている。周縁は幅広で比較的高く突出する。「百濟末期様式」の中にあっても、花卉の稜線や楔形の間弁は高句麗系瓦から



第3図 衣川廃寺測量図（文献1より）



- A 衣川廃寺
- 1. 大宝寺跡
- 2. 真野中村廃寺
- 3. 坂本八条廃寺
- 4. 穴太廃寺
- 5. 崇福寺跡
- 6. 南滋賀町廃寺
- 7. 園城寺境内廃寺
- 8. 東浦廃寺
- 9. 膳所廃寺
- 10. 石居廃寺
- 11. 笠寺廃寺
- 12. 大般若寺跡
- 13. 東光寺跡
- 14. 宝光寺跡
- 15. 花摘寺廃寺
- 16. 赤野井廃寺
- 17. 益頼寺跡
- 18. 拍坂寺

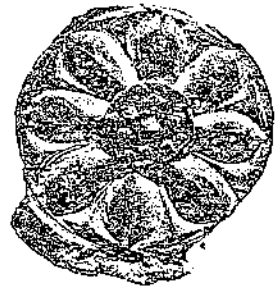
第5図 近江南半部主要古代寺院分布図



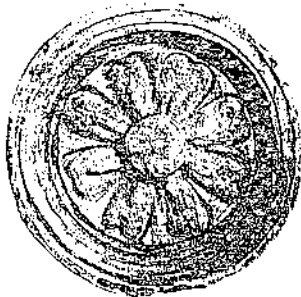
I類



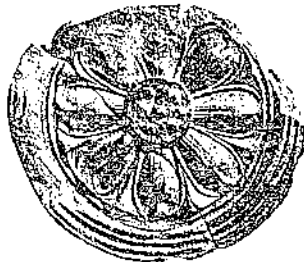
II類



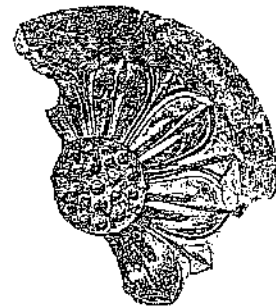
III類



IV類

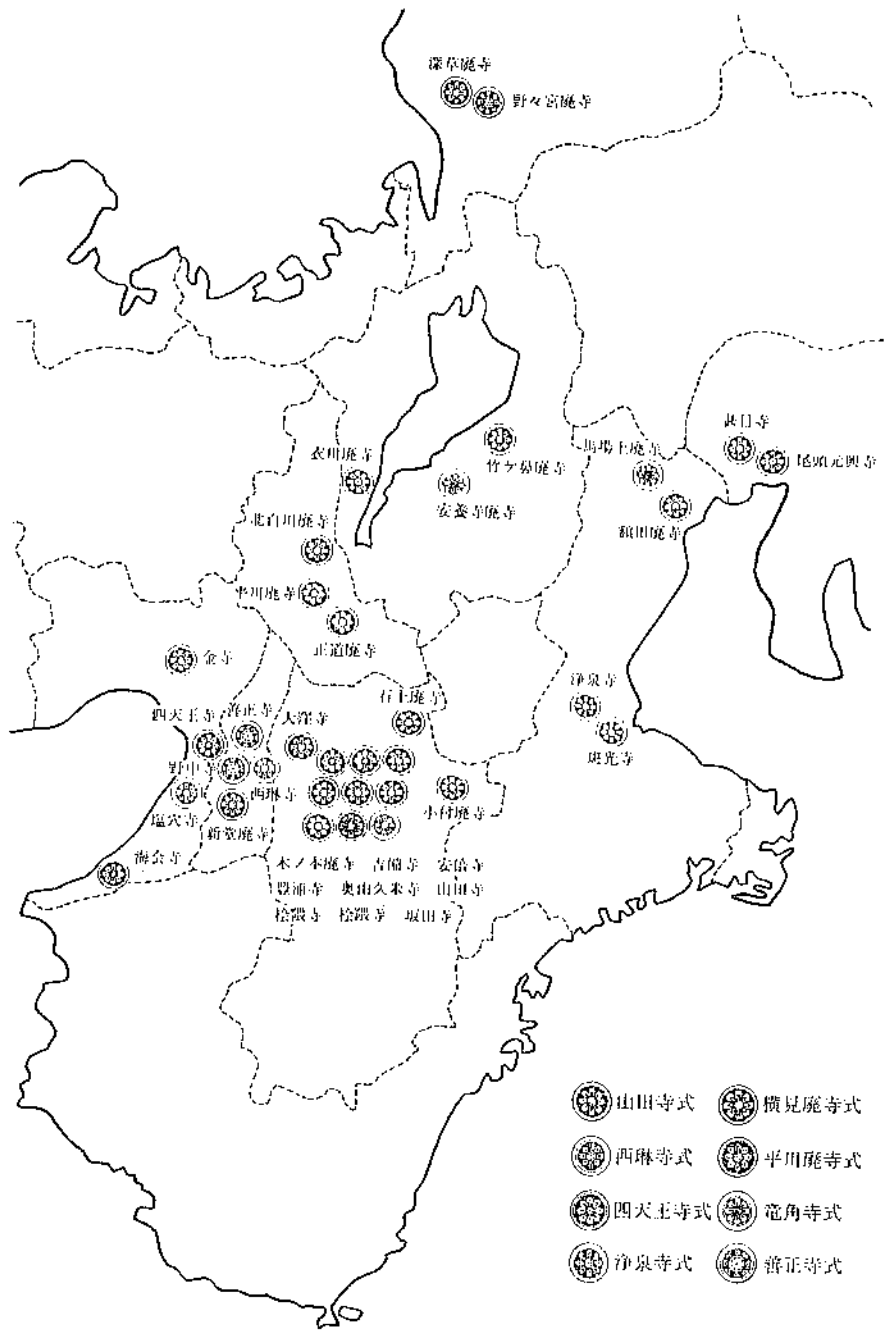


V類



VI類

第4図 衣川廃寺出土軒丸瓦（文献1より・番号は分類番号に一致する。）



第6図 山田寺系軒丸瓦分布図 (文献7より)

の強い影響を伺わせる。「百済末期様式」の影響を受けた「飛鳥高句麗様式」であるⅡ類軒丸瓦との関連で成立したものと考えられ、大津市南滋賀町麿寺等で多用されている「高句麗系百済末期様式」の軒丸瓦類とは明確に俊別されねばならないだろう。なお、Ⅱ類とⅢ類の区別は必ずしも厳密に行い得るものではなく、両者の関係性の強さを示している。

Ⅳ類一重圈文縁単弁 8 葉蓮華文瓦 「百済末期様式」軒丸瓦の中にあつて単弁系瓦と呼ばれるものである。中房はやや大形化したもので高く突出し、1+6の蓮子を有する。花卉は中肉に表現されるものであり、先端部に切り込みを入れ、花卉の返りを表現する。子葉は小振りで細長いものであるが、明瞭さを欠き稚拙な表現である。間弁は楔形を呈するが三角形に近いものである。内区と外区の境には細い圈線を巡らせる。周縁は幅広で高く突出するものであり、あるいは篋描きかとも考えられる稚拙な表現で三重圈文を施している。所謂「単弁系瓦」と呼ばれる内にあつて、比較的百済の故地において形成された文様に近いものである。大阪府善正寺等に類例が存在する。「単弁系瓦」が日本的に展開し「山田寺式瓦」を形成するが、その系譜とは区別して扱うべきものとする。

Ⅴ類一重圈文縁単弁 8 葉蓮華文瓦 所謂「山田寺系瓦」と呼ばれるものである。中房は小振りで、1+6の蓮子を有する。花卉は肉厚に表現される整美なもので、凸線状の輪郭を有し個々の花卉はシャープに表現されている。弱い稜線を有し、花卉の返りも明瞭に認められる。子葉は小振りでやや細長いものである。そこには、葉脈が3条の弱い凸線によって表現されている。間弁は楔形を呈する均整のとれたものである。内区と外区の境には明瞭な圈線文が存在する。周縁は高く突出するものであり、やや稚拙な表現ではあるが4重圈文で飾っている。「山田寺系瓦」の中にあつて、内・外区界の圈線文が明瞭なタイプであり、山田寺における塔や講堂、あるいは大阪四天王寺で使用されたものと同一の形式に含まれる。また、この圈線に関してはⅣ類とも共通しており、衣川麿寺のみに限定されるものではないが、単弁系瓦の一つの特徴と理解されよう。

Ⅵ類一素文縁複弁 8 葉蓮華文瓦 他の類例には乏しい衣川麿寺特有の軒丸瓦である。中房は大形化したもので高く突出する。1+8+12の多数化した蓮子を方形に配置し、中房の外縁には圈線が存在する。花卉は輪郭を凹線によって明瞭に表現した鋭利なものである。花卉中央に弱い剣先状を呈する稜線をたてて、花卉を二分する。花卉先端は鋭く尖り、花卉の返りを表現している。二分された花卉のそれぞれに、先端の尖る細い子葉を配する。間弁は中房から伸び、最後扇形状に広がる。またその先端部は尖り、花卉と同様の稜線を有している。まさに花卉の重なりとして間弁が意図されたものであり、その表現は花卉と全く共通している。周縁は幅広で高く突出し、鋭利な表現である内区に比して対象的である。広義の「百済末期様式」に含まれるものと考えられるが、本来的には北魏・高句麗で成立した軒丸瓦である。複弁系瓦では、初唐様式である「川原寺系瓦」や「法隆寺系瓦」が盛行するのに対し、北魏系の百済末期様式瓦は限定的な存在ではない。衣川麿寺出土の軒丸瓦の中で最も整美で丁寧に造られたものである。あるいは、衣川麿寺の主流となるものかもしれない。

以上、6種の軒丸瓦について説明してきた。いずれもが飛鳥時代末期から白鳳時代にかけての特徴を有するものであり、一連の変化の中で理解される。また同一種類の瓦であっても、固体差

が著しく観察され、その変化には一定の時間の介在が存在したものと想定できる。こうした現象からすれば無意味とも考えられるが、6種の軒丸瓦を3つの段階に分けて説明してみたい。

I期—I類とII類が該当する。所謂「飛鳥様式」の最末段階を示す軒丸瓦である。両者の軒丸瓦は明らかに系譜を異にするものであり、本来的には異なる工人集団によって保有された技術・文様であると理解される。しかし、豊浦寺創建時において早くも両者は混用されている⁽⁴⁵⁾。絶対的な瓦工人の不足が存在し、しかも少数の工人集団が有力氏族によって独占されていた事実を示す。それはともかく、衣川廃寺において創建段階に両者が混用されている事実は、寺院創建に関する諸技術の系譜が、豊浦寺や中宮寺、奥山久米寺等の両系譜の瓦を混用する寺院に求めるべき点を想定させる。すなわち、二つの系譜の軒丸瓦が個別的に導入されたものではなく、二者がセットとして他の寺院建立の技術とともに導入されたものと理解できる。穴太廃寺では高句麗系瓦のみで創建瓦を形成し⁽⁴⁶⁾、衣川廃寺とは状況を異にしている。両寺院の創建に際して、それぞれの技術等の系譜に位置する〈中央氏族〉が異なる事実を示すものであろう。同時に、退化した二系統の瓦を用いている事実は、確実にその技術的な先行寺院の存在を示すものである。付近一帯では窯業活動が活発であり、技術的な先進地帯と理解できる。しかし、〈中央〉に技術的な裏付けを求めて、これによって初めて寺院を建立している。軒丸瓦に表出される技術的な〈中央〉と衣川廃寺の関係が、単に技術論に終始するものではなく、その上部構造たる〈中央〉と〈地方〉との政治・経済的な現象に他ならないと推定させる。寺院建立には技術ではなく、政治・経済的な〈中央〉との関係が必要だったのである。

I類は、相当に退化したとの感を受ける。しかし、それは周縁の大形化によるものであり、内区の様相自体は飛鳥様式として十分にシャープさを維持している。周縁の大形化が瓦当と丸瓦の接合上生じてきた現象であると理解するなら、この年代をさほど新しく考える必要は存在しない。一方、II類はその特徴である稜線の退化は決定的なものである。しかし、豊浦寺補修瓦と比較した場合、むしろ衣川廃寺出土品の方が花卉が細くシャープであり、高句麗系としての様相を強く維持している。周縁や間弁の状況は逆に衣川廃寺出土品の方が新しい様相を示す。これらの視点から、I期の年代を620~640年頃と考えておきたい。つまり、620~640年頃に〈中央〉の何らかの氏族（氏寺）と関係することによって、軒丸瓦製作の技術等によって表出される寺院建立への諸条件を導入し、衣川廃寺は、寺院建立へ向けて本格的活動を開始したのである。

II期—III類の瓦であり、確定する要素に欠けるがIV類の瓦もこの段階の所産である可能性が高い。すなわち、I期とは異なり独自の軒丸瓦を使用する段階である。III類の百濟末期様式瓦は、型式はそれぞれ異にするが広く汎日本的に分布するものである。百濟亡命氏族・工人等が日本へ波及させたものであり、これを契機として寺院建立への動きが日本的に広がるのである。古代寺院の爆発的増加の一つに、この百濟末期様式の多量の導入が存在する。近江南半部においても百濟末期様式はほとんど全ての古代寺院で確認でき、中でも南滋賀町廃寺⁽⁴⁷⁾と草津宝光寺は⁽⁴⁸⁾百濟末期様式の軒丸瓦の導入によって、寺院建立を達成させている。

さて、III類の百濟末期様式はII類の高句麗系瓦との関連を示すものであり、むしろその俊別さえ下し難しいものも存在する。これは両者の軒丸瓦の年代が近接する事実を示す。同時に〈中央〉

との関係性の結合によって導入された技術を基礎として、そこに在来（あるいは新来）の技術を組み合わせることによって『衣川様式』とでも呼ぶべき全く新しい技術を成立せしめた事実を物語る。I期における〈中央〉との無批判な関係から変質し、自らの独自性を強く表出することを指向し始めたのである。そして、この動向の到達点としてIV類の軒丸瓦が成立する。これは北魏的百済末期様式である。日本国内ではほとんど類例が知られておらず、百済の故地との強い関連を想起させる。そして、天神山窯跡群で朝鮮系とも考えられる須恵器を焼成している事実⁽¹⁹⁾を合わせて考えれば、須恵器生産等に参加していた地元の工人層の一部が衣川廃寺建立へ移動した結果であるとも判断できる。極めて渡来的様相を強く表出する軒丸瓦ではあるが、本来的な渡来性はともかく、地元の技術の参加であり、独自性の表出に他ならない。つまり、II期は〈中央〉との関係から変化し、衣川廃寺としての独自性を強く表出する段階と規定できる。この過程において、百済末期様式という広範囲に広がる様式を契機としつつも前段階の〈中央〉から導入した軒丸瓦を基本とするパターンと、地元の有する技術力によって全く新しい瓦の創出を繰り返すパターンとに大別される。前者のパターンはむしろ一般的であり、こうした段階にあっても尚〈中央〉との関係が作用していたであろうと考えることも可能である。一方後者のパターンにおいては、全く〈中央〉の介在は想定されないものである。そして、後者のパターンが可能であるという背景には、本来的にも寺院建立に関する諸技術が〈在地〉的に存在した事実を示す。こうした技術が存在するにもかかわらず、I期の段階ではそれを示さず、〈中央〉との関係によってのみ寺院の建立を実施している。つまり、I期では〈中央〉との関係性の結合が寺院建立に対する絶対的な条件であったのに対し、II期ではもはやその関係性は必要ではなく地元の技術を用いて寺院建立へ動いている。そして、その関係性さえ当初の段階で結合しておけば、もはや氏族の独自性を強く表出しつつの寺院建立は可能となった⁽²⁰⁾。つまり、独自性の発揮がどの程度可能であるかが、この段階の寺院建立の全てを規定する。

III類の瓦は、II類との類似性より若干の後出性が存在する程度である。一方IV類では、大型化した中房と多数の蓮子配置と周縁の大型化という現象が確認される。これらより、II期の年代を640～670年程度のもと考えておきたい。すなわち、近江大津宮時代はこのII期にほぼ包括されるものであると考える。

III期—IV類とV類の瓦が該当する。所謂「単弁系瓦」である。型式・系譜的に見ても両者の瓦は近似するものであり、その存在する意味においても区別し難い。ここでは同列に扱いたい。V類は「山田寺系瓦」であり、全国的に広く分布するものである。同じく全国的な分布を示す「川原寺系瓦」や「法隆寺系瓦」と合わせて、天武朝期における代表的軒丸瓦である。そして、それらは天武朝期における政策の一つとして各地に分与されていったものである。すなわち、衣川廃寺は「山田寺系瓦」の入手によって再び〈中央〉との関係を強く表出するようになる。一方、IV類はV類と同一系統に位置するものであるが、花卉等の作りは、百済の故地に存在するものに近い形態を示す。しかし、この事実を衣川廃寺建立氏族の独自性・渡来性に起因するものと考えすることは出来ない。この場合なら、このIV類の軒丸瓦がII期の段階で出現していても十分に説明が可能だからである。IV類の軒丸瓦は、V類の軒丸瓦と同様に「山田寺系瓦」の一バリエーション

として、〈中央〉から導入されたものである。つまり、Ⅲ期とは再び〈中央〉との関係性によって寺院建立の過程が始動し、それが軒丸瓦に表出される段階である。ただし、この〈中央〉とはもはや有力な個別氏族ではなく、「山田寺系瓦」という〈国家〉的レベルの寺院建立に起原を有する軒丸瓦の存在で明らかのように「国家」という言葉に替え得る存在なのである。すなわち、衣川廃寺の建立に際して「国家」が関与してくるのである。

「国家」の寺院建立への関与は、衣川廃寺のみの特殊性ではない。「山田寺系瓦」「川原寺系瓦」「法隆寺系瓦」の3者は広く全国に分布するものであり、この点から見ても「国家」は広く全国の寺院建立へ関与した事実は明白となる。衣川廃寺もまさにその一つに数えられるであろう。しかし、一般的傾向としてこの時代の軒丸瓦は「地域性」としての分布圏を形成する。近江南半部の場合「川原寺系瓦」がそれであり、南滋賀式複弁瓦の問題も存在するが、その近江南半部における分布圏の中心には崇福寺に導入され、さらに南滋賀町廃寺に至る川原寺同範瓦が存在するものと理解して大過なからう。南山城地域でのこうした軒丸瓦の傾向はより顕著である。高麗寺と宇治大鳳寺を中心とする「川原寺系瓦」の分布圏を明瞭に形成するものであり、紀伊郡を中心とする「紀寺系瓦」の分布圏も存在する⁽¹⁾。こうした視点からすれば、衣川廃寺の「山田寺系瓦」は近江南半部では全く孤立した存在であり、全く分布圏を形成しない点で特異なものである。さて、衣川廃寺出土の「山田寺系瓦」では、山田寺と同範瓦の存在は確認されていないが、シャープなものであり、祖形としての山田寺所用瓦に近似する存在であると認められる。すなわち、分布圏の中心に位置しても決して無理の存在しない軒丸瓦と言い得るものである。しかし現実として分布圏は存在せず、孤立的に「山田寺系瓦」が衣川廃寺において使用させられているのみである。こうした現象は、衣川廃寺が建立途中において廃絶した事実に関連するものと考えられる。つまり、衣川廃寺において確実に定着してこそその種の軒丸瓦の分布圏の中心に成り得るものであるが、その定着を達成する以前において衣川廃寺が廃絶したため、分布圏を形成するに至らなかったものとの理解している。こうした仮定に立てば、衣川廃寺は当初は重視された有力寺院としての扱いを受け、軒丸瓦の分布圏の中心に位置すべきものであったが、何らかの火災が原因となり廃絶してゆけば、もはや二度と再建されることも無く、重視される有力寺院としての扱いを受けるところか、全く忘れられた存在へと変化していったのである。

V類・IV類両者共内・外区界として、圏線文を明瞭に巡らせるものである。これは明らかに天武朝期の特徴である。しかし、圏線自体文様として確立されたものではなく、文様全体としてのシャープさも特徴的である。天武朝期としても古い段階に位置付けるべき要素である。670～680年頃の年代を考えておきたい。また、この年代が衣川廃寺の廃絶年代と一致する点も説明の必要も無いだろう。

以上、軒丸瓦の分類からそれを3つの段階に分けてきた。それを整理し、伽藍の状況を合わせておく。

I期 〈中央〉の有力氏族の氏寺との関係性の結合によって寺院の建立が開始される段階である。あるいは、最初の契機としてのみI期が存在するものかもしれない。すなわち、単発的・一時的現象と理解できる。

Ⅱ期 I期における契機を自らの独自性へと変質させ、本格的ペースで寺院を建立する段階である。おそらくこの段階において金堂が完成するものとする。そして、このI期とⅡ期はむしろ連続的であり、一つとして衣川廃寺の最初の時代であると考えられる。

Ⅲ期 「国家」的な関与によって、再び寺院建立の動向が活発化する段階である。これは天武朝期における政策の一つであり、その中でも「軒丸瓦分布圏」の中心に位置すべき重要な扱いを受けている。これによって塔が本格的な建築物へ移っていくが、いずれかの段階において火災を受け、衣川廃寺全体が廃絶してしまう。I・Ⅱ期からへ若干の年代の進行が想定され、衣川廃寺の第2の時代と考えられよう。

4. 問題の所在

前章までにおいて、衣川廃寺の沿革を軒丸瓦を中心として概観してきた。衣川廃寺は、近江大津宮時代を挟む2つの時代に渡る沿革を有するものである。すなわち、最初は、〈中央〉からの軒丸瓦を契機として独自性を強めつつ「金堂」が建立された時代である。〈中央〉からの軒丸瓦導入という契機が必要であるものの、氏寺としての独自性を確実に表出し得た段階であった。第2の時代は、「国家」的な関与が衣川廃寺に下されたものである。軒丸瓦を何らかの意図によって統一し、政策の表出としたものである。「塔」の建立からがこの段階のものであるが、建立途中にして廃絶している。こうした衣川廃寺の沿革によって、古代寺院に対するどのような問題点が抽出されるであろうか。簡単に問題点を整理し、小稿のまとめとしたい。

第一の問題は、〈中央〉との関係を前提として寺院の建立が開始されている点である。飛鳥時代積極的に仏教を推進した主体は、蘇我氏であり、上宮王家である。両者は積極的に技術を交換し、それぞれの保有する工人等の交流も活発なものであった。豊浦寺と「広隆寺」を結びつける宇治集上り瓦窯の存在がそれを如実に示すものであり⁽²²⁾、法隆寺創建の軒丸瓦は明らかに飛鳥寺からの軒丸瓦の系譜に位置するものである。両者は、自らの氏族・同族を中心として寺院建立を広めていったものであり、こうした状況下における寺院建立は限定的な行為として一部畿内の有力氏族の特権と言い得るものであった。しかし、次第に寺院建立の動向は「地方」へも広がり、衣川廃寺はまさにその段階に位置するものである。「地方」への寺院分布の拡大の背景には、百濟末期様式の成立に見る百濟亡命工人の多量渡来という事実も存在するが、工人増加を前提とした〈中央〉氏族の「地方」への勢力拡大という意図が存在したものでなかろうか。寺院建立には技術的な諸問題も多く存在するが、多量の工人や一般労働力の組織化に代表されるような、あるいは、永久的な土地の使用や多量の物資の集積という「経済的」問題がより大きく存在するものである。自らの氏寺建立に伴い経験的にその問題を知り得た〈中央〉の有力氏族が、「地方」への寺院建立の拡大という形で、「地方」でのそうした問題を代弁的に解決することによって「地方」への勢力進行を達成しようとしたものでなかろうか。「地方」への古代寺院の広がりや、そうした〈中央〉の有力氏族の動向によって達成された。衣川廃寺における二者の「中央の軒丸瓦」は、そうした「経済」的な保障と〈中央〉有力氏族の勢力を示すものであり、具体的な寺院建立は衣川廃寺独自とも言い得る二者の瓦によって実施されている。

第二の問題は、所謂「近江大津宮時代」においては、寺院建立活動がほとんど実施されていないとも考えられる点である。坂本八条廃寺以下、大津市域の諸寺院あるいは草津・守山市域の諸寺院は、この時代非常に活発な寺院建立活動を展開する⁽²³⁾。言うまでもなく、これは近江大津宮時代の一つの政策の表出である。大津市域の諸寺院を近江大津宮の交通・防御の点からのみ理解するなら⁽²⁴⁾、湖上交通上衣川廃寺は決して無視できないものであり、それが寺院建立活動の中から疎外されている事実は説明し難いものとなってくる。今、近江大津宮時代に活発な建立活動を示す諸寺院を見れば、全てが渡来系氏族との関連を強く示すものである。一方、衣川廃寺では、確かに渡来系氏族との関連も想定できるが、基本的には和邇系氏族の氏寺であり、彼らは、日本古来からの氏族と認められる。近江大津宮時代の政策の一つに渡来系氏族の組織化が存在し⁽²⁵⁾、それによって「遷都」が断行され、さらに彼らを中心とした寺院建立活動が実施されていると理解するなら、衣川廃寺はまさに寺院建立活動から疎外されても然るべき存在である。あるいは、衣川廃寺が有していた工人集団が他の寺院に配置された可能性も存在する。いずれの場合にしろうした視点が、和邇系氏族が古来から有力氏族として〈中央〉に存在してきた事実によるものか、単にその時代の選択によるものかの判断は下せないが、衣川廃寺が渡来系氏族の氏寺ではない事実のみをここでは強調しておきたい。

第三の問題は、「山田寺系瓦」の導入である。これらは明らかに「国家」による寺院建立への関与である。古代寺院への「国家」による関与が天武朝期の重要政策の一つである事実は、同時代における爆発的な古代寺院の増加現象から見ても明らかである。おそらく、第一の問題で説明したような「経済的」問題への関与、氏族関係を規定する「神話」に代わるべき仏教イデオロギーの浸透、「律令的体制」のシンボルとしての寺院景観等々の側面によって、この政策は広く実施されていったものと考えられる。ところで、この時代における「国家」の寺院建立への関与は、「山田寺系瓦」「川原寺系瓦」「法隆寺系瓦」という大きく3つの方法によって実施され、その他の瓦の存在や伽藍配置等のバリエーションも含めれば、寺院建立への細かい規定が用意されていたものと考えられる。これには、美濃地域に「川原寺系瓦」が広く分布する等の現象も指摘され、一定の意図が媒介されたであろう点が、明らかである。衣川廃寺に「山田寺系瓦」が用いられた事実は、何らの意図が作用したものであるのだろうか。大津市域においてこの時代では、「川原寺系瓦」の分布が特徴的となる⁽²⁶⁾。これは、川原寺式瓦に先行する南滋賀町廃寺式瓦の存在による点が大きいものであり⁽²⁷⁾、さらにその後の段階に川原寺同范瓦が導入されることによって、分布圏を形成している。すなわち、天智・天武の二代に渡る動向の結果として「川原寺系瓦」の分布圏が形成されたのである。一方、衣川廃寺は天智期においてはむしろ疎外された存在であり、ほとんど建立活動を実施していない。そして、こうした寺院に「川原寺系瓦」ではなく「山田寺系瓦」が用いられたのである。その詳細については規定できないが、衣川廃寺の近江大津宮時代における立場が、天武朝期に至り「山田寺系瓦」を採用せしめたものと想定するのは妥当であろう。すなわち、「山田寺系瓦」の採用によって衣川廃寺は、天智朝期の大津市域等の諸寺院との差異を表出したものであり、これは天武朝期における政策によって補障されたものであった。ただし、これが天武朝期の政策として、衣川廃寺と大津市域諸寺院との差異を明瞭にするためのみであっ

たのか、衣川廃寺を核として大津市域等の諸寺院にまで「山田寺系瓦」が及ぶべき『近江大津宮時代の否定』という方向性を指向したものであったかの判断は現状では下し難い。今後の課題としておきたい。そして、衣川廃寺の「山田寺系瓦」は地域的な展開を示さず、大津市域において孤立した存在である点に、その問題に対する糸口が存在するものと指摘しておく。

第四の問題は、寺院の廃絶に関するものである。衣川廃寺は建立主体の意図のみならず、〈中央〉氏族の勢力拡大や天武朝期の政策という側面を維持しつつ、建立・整備されたものである。しかし、金堂と塔のみの未完成な伽藍のまま火災によって廃絶し、二度と再建されることはなかった。そこにおいては、〈中央〉の有力氏族あるいは「国家」の意図の途中における挫折すら感じられる。ところで、多くの古代寺院は、衣川廃寺のように極端な場合も少ないが、決してその歴史は長くないのが一般的である。平安時代以降にまで連続する場合でも極端にその規模・内容を縮小しているものが大半である⁽²⁰⁾。すなわち、古代寺院は連綿とその法燈を伝える点に目的が存在するものではなく、建立する行為自体にその大きな目的が存在するものと理解される。従って、衣川廃寺が建立途中に廃絶しているものであっても、古代寺院を建立しようとした目的は一定レベルにおいて達成されたものであり、そこには挫折は存在しなかったとするのが妥当であろう。衣川廃寺を含めた衣川遺跡全体で見れば、天武朝以降も順調な発展を示している。円面硯や緑釉陶器を出土する遺跡の性格として、白鳳時代後期あるいは奈良時代に寺院が再建されていても然るべきものである。むしろ「敢えて」再建されなかったとも考えられる。ただし、数点の軒丸瓦の出土のみで断言されるものではないが、衣川廃寺の廃絶直後に建立されたと考えられる真野中村廃寺が存在する⁽²¹⁾。数kmの近接地に存在し、かつ時代的な視点からすれば衣川廃寺の後身とも考えられ、「法燈」としては維持された可能性は十分に存在する。しかし、あくまで衣川廃寺は周囲の衣川遺跡とセットとして理解されるべきものである。衣川遺跡は寺院廃絶後も段階的発展を示すものであり、真野中村廃寺は明らかに衣川遺跡の外部に位置するものである。法燈として両寺院の連続性を想定するものであっても、衣川遺跡から寺院が廃絶した意味は説明されねばならない。いずれにしろ、衣川廃寺の絶滅は他より著しく早いものであるが、建立という最大の目的は最低限に達成されたものであり、この意味からすれば他の古代寺院と何ら変化する点は存在しないのである。そして途中までとは言え、一度寺院を建立したことによって「国家」的に何か保障され、その保障によって衣川遺跡の発展が維持されたとも考えられる。衣川廃寺はまさに、寺院建立の意味の大きさを示すものであり、その廃絶が決して氏族の没落に一致しない事実を表出しているのである。

以上、4つの問題を指摘しておいた。そのいずれもが相互に関連するもので、個別的に存在するものではない。また、その4つの問題のいずれもが決して衣川廃寺単独の問題として完結するものではなく、周辺のあるいは全国的な古代寺院一般の問題として理解されねばならないものである。まさに、一連の「古代寺院論」としてのみそれらの問題は解決され得るものである。今回は問題点の存在のみを指摘し、いずれ「古代寺院論」としてそれらを追求していきたく考えている。

5. おわりに

以上、論点が不明なものとなったが、衣川廃寺の軒丸瓦の分析から、その表出する問題を追求してみた。筆者は、坂本八条廃寺や八幡平野山瓦窯の発掘調査に参加することによって、古代寺院とりわけ古代瓦の問題に接するようになった。穴太廃寺・海会寺・高麗寺・宮井廃寺等の見学も大いに興味を持たせるものであった。考古学的な歴史のメルクマールとして古墳と官衙遺跡が指摘できるなら、まさにその時代的中間に古代寺院は位置するものである。天武朝期における一つの政策として「寺院建立」が確かな以上、その政策の内容を寺院遺跡を媒介として具体化する必要が存在する。すなわち、古墳→寺院→官衙と連続する「メルクマーク的構築物」の分析を通じて、古代国家成立史を考古学的に語らねばならないのである。今回は、衣川廃寺という限定的な立場からであったが、古代国家成立史に対する一つのデータを提出できたものとする。今回のデータを「古代寺院論」あるいは「古代国家論」の中でいかに位置づけていくか、今後に残された大きな課題である。

尚、末筆ながら、広瀬和雄・吉水真彦・福井真理子の諸氏には、多くの御教示・御協力を得たことを記して謝意を表したい。

注

- (1) 林博通「大津京」(『考古学ライブラリー』27 1983年)
- (2) 衣川麿寺出土遺物は、結城実誠氏の保管となっている。資料の実見を快諾された結城氏に謝意を表したい。
- (3) 吉水真彦「衣川遺跡発掘調査」(『びわ湖と埋蔵文化財』1984年)
- (4) 滋賀県教育委員会「大津市衣川 坂尻古墳群調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』1976年)
- (5) 滋賀県教育委員会「大津市真野 春日山古墳調査報告」(1976年)
- (6) 現在、京都教育大学考古学研究会によって測量調査が実施されている。その成果は順次『藤陵祭 展示』として公表されている。
- (7) 水野正好「滋賀郡所住の漢人系帰化氏族とその墓制」(『滋賀県文化財調査報告』4 1969年)
- (8) 京都教育大学考古学研究会「考古学ノート 堅田春日山古墳群への招待」(『藤陵祭 展示パンフ』1987年)
- (9) 石原進 丸山竜平『古代近江の朝鮮』(1984年)
- (10) 付近一帯で結城実誠氏が多くの資料を採集されている。それらの中には窯の存在を想定させるものが少くない。
- (11) 注(8)と同じ
- (12) 注(10)と同じ
- (13) 細川修平「遺跡群の位置と歴史的環境」(『大津市埋蔵文化財調査報告書』10 1985年)
- (14) 大津市教育委員会 吉水真彦氏の御教示による。筆者実見
- (15) 1979年度の発掘調査によって「若草伽藍所用の百濟様式瓦」との同范瓦が出土したという。
- (16) 大橋信弥「大津宮時代前後の寺院址—滋賀県穴太麿寺—」(『季刊考古学』10 1985年)
- (17) 細川修平「大津北郊の白鳳寺院」(『大津市埋蔵文化財調査報告書』10 1985年)
- (18) 小笠原好彦「宝光寺跡の造営時期と廃絶時期」(『草津市文化財調査報告書』12 1987年)
- (19) 注(9)と同じ
- (20) ただし、中央との関係性が希薄となった事実と、衣川麿寺の造営ペースが非常に遅い事実との間に一定の関係が存在するものと考えている。氏族独自の技術力等では、寺院建立に限界性が存在したのも事実であろう。
- (21) 京都府立山城郷土資料館『山城の古瓦』(1983年)
- (22) 宇治市教育委員会『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』(1983年)
- (23) 注1と同じ
- (24) 例えば、註I 林文献や、松浦俊和「古道と遺跡」(『史想』18 1979年)か、こうした視立に立脚する古代寺院論である。
- (25) 近江大津宮時代には百濟亡命氏族が多量に渡来した時代でもある。東アジア的視野に立てば、百濟亡命に伴う渡来人の移入と近江大津宮成立に何らかの関係が存在したのと考えられる。詳細については別稿を計画している。
- (26) 注(17) 大津市域の「川原寺系瓦」は、坂本八条麿寺・穴太麿寺・崇福寺跡・南滋賀町麿寺で

出土しており、草津市宝光寺跡・片岡廃寺・観音堂廃寺等々においても確認できる。

(27) 一般には南滋賀町廃寺式軒丸瓦は川原寺式軒丸瓦に後出するものとされる。

しかし、安井良三「檀木原瓦窯跡調査に関連する諸問題」(檀木原遺跡発掘調査報告)(滋賀県)1975年)、金子裕之「軒丸瓦製作技法に関する二、三の問題」(『文化財論叢』(1982年)では南滋賀町廃寺式軒丸瓦を先行するものとされる。筆者も南滋賀町廃寺式軒丸瓦の先行を認めるが、その一本造り技法を含め造瓦技術の系譜上では両者は異なるものかもしれないと考えている。また、穴太廃寺出土等「複弁系瓦」の中には、南滋賀町廃寺式軒丸瓦の先行を認めるが、その一本造り技法を含め造瓦技術の系譜上では両者は異なるものかもしれないと考えている。また、穴太廃寺出土等の「複弁系瓦」の中には、南滋賀町廃寺系のものと川原寺式のものとの両者存在するものである。

(28) 大津市域では例えば、坂本八条廃寺や穴太廃寺では奈良時代以降の軒丸瓦はほとんど検出されていない。

(29) 西田弘「近江の古瓦 VII」(『文化財教室シリーズ—82 1986年)

参考文献

- ① 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「衣川廃寺発掘調査報告」(1975年)
- ② 西田弘「近江の古瓦 VII」『文化財教室シリーズ』82 (1986年)
- ③ 大津市役所「新修 大津市史」I. 古代 (1978年)
- ④ 滋賀県立近江風土記の丘資料館「近江の古瓦」(1978年)
- ⑤ 奈良国立博物館「飛鳥・白鳳の古瓦」(1970年)
- ⑥ 稲垣晋也「古代の瓦」(『日本の美術』66 1971年)
- ⑦ 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館「山田寺展」 (1981年)

編集後記

年度当初に、これまであまり活発でなかった文化財愛護のための普及啓発事業について、今年度からはより充実したものを計画せよと命ぜられた折り、各種の展示会などの一般向けの事業のほかに、専門知識の普及啓発を兼ねて財団職員の普段の研修の成果を公表できるよう『紀要』の発刊を試みることにした。10名程度の論考を掲載することとしたが、実のところ、あまり原稿が集まらないのではないかと不安であった。しかし、これは取り越し苦労で、希望者を募ったところ即座に10名の申し出があり、職員の隠れた研究意欲を垣間見た次第であった。本年は創刊の年ではありますが、初心を忘れることなく続けたいものと思う。

(普及啓発事業担当)

昭和63年3月 初版
平成4年3月 2刷
平成6年3月 3刷

紀 要 第 1 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781
印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241